

09・シーラは永遠のしもべ

トラック08から十数分後。

五月二十日。十九時ごろ。

場所は主人公の自宅、庭園。

S E 1 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【0～8秒ほどまで流して『シーラ』のセリフ】

【その後、ごく小さな音量で流す】

【トラック終了まで流し続ける】

主人公とシーラ、服を着直した状態で、抱き合ってガゼボにいる。

セックスの後特有の、とても眠いけれど、寝るのは勿体なくて、なんとか起きていようとしている状態。

〈主人公〉

「そういえばさあ」

そんなまつたりとした甘い空気の中、主人公は、ふと気になつて切り出す。しつかり抱きついて、シーラに密着した状態で話しかける。

●正面 【※15センチほど上※】 0センチ

「優しく続きを促す。

主人公が何か話そうとしているので

うん……？」

△主人公

「ちょっと、シーラに聞きたい事があるんだけど」

だが、この話題は、今までのものとは大きく違うため、少々唐突である。当然シーラは主人公が何を話す気なのかもわからず、首を傾げている。

S E 2 シーラが身体を動かす音
【最初から最後まで流す】

シーラ、主人公と話すために顔を近づける。

これによつて、声の位置が変わり『正面 15センチ』になる。

●正面 15センチ

「少し不思議そうに。

主人公が何を聞こうとしているのか、見当がつかないので】

あら。

何（なん）でしょう」

△主人公

「今の現国でやつてる、小説の事なんだけど……」

●正面 15センチ

「『ああ、その事か』という感じで。

主人公が何を話したがつているのか、これだけでおおむね理解できた気がするので】

ああ」

だが、まだこれしか言つていないので、シーラは何かを察したような顔だ。すでに質問の内容がバレているような気がして、主人公は恥ずかしくなるが……そのまま話を続けた。

●正面 15センチ

「さらっと意地悪を言う。

主人公が何を話したがっているのか、これだけでおおむね理解できた気がするので】
お嬢様が個人的な感情をお寄せになるあまり補習の要因となってしまった、現国的小説でございますね】

（主人公）

「ちょっと！ そうだけど！

なんか随分余計な情報がくつついでない!?】

●正面 15センチ

「くすくすと嬉しそうに。

主人公の反応がとても可愛らしいので。

また、意地悪を行つてしまつた理由を述べていく】

ふふっ ♥ 申し訳ありません。

あの作品。

お嬢様が熱中してお読みになり、解釈を語られるお姿が、とても可愛らしかったもので
すから、つい…… ♥

「一呼吸おいてから。
優しく続きを促す。

話が脱線しそうになつたので、元に戻している
あの作品が、どうかなさつたのですか？」

（主人公）

「……」

しかし、多少嫌味を言いつつも、主人公の話は全部聞いてくれるのがシーラだ。
主人公はこれにきゅんとなつて、再び甘えモードに入りたくなる。

だが、今はそれ以上に気になる事があった。

主人公は甘える代わりに、先ほどからずっと気になつていた事を尋ねていく。

（主人公）

「……今日さあ、補習受けてきたじやん」

●正面 15センチ

「優しく続きを促す。

穏やかに頷いて」

ええ」

〈主人公〉

「そしたら、途中であまねと日菜子が様子見に来てくれたんだ。
ほら。あまねがシーラに連絡したあたりの時刻。
そこで少々、日菜子と解釈バトルになりましてね」

●正面 15センチ

「優しく続きを促す。

少しだけ驚いた感じで。

もちろん、補習中の主人公のとを、あまねと日菜子が訪れた事は知っている。

だが『解釈バトル』をした事までは知らなかつたので。

また『補習には監督がいるはずだが、その監督はどうしたのだろう？ 終わつてから三

人で話したのだろうか?』とも思っている。

主人公もあまねも、若干説明不足な傾向がある。

そのせいで、シーラは補習の様子を完全には把握していない】
あら……』

『主人公』

『まあ、バトルって程でもないんだけどね。』

お互に、『正解っぽい解釈』じやなくて、『自分なりの解釈』。

日菜子的には『主観多め』の解釈つてやつを話したんだ。

そしたらまあ、わたしと日菜子では随分感想が違ったわけ。

だからちよつと、シーラの意見も聞いてみたくなつちやつて……』

●正面 15センチ

『相槌を打つて、優しく続きを促す。

また、確認のため、主人公の意図するところを復唱する。

主人公の話に不明な点はいくつがあるが、ひとまずそれはあまり重要な情報ではなさそうだし、そのまま話を聞く』
なるほど。

そのような事がおありになつたのですね。

だからお嬢様は、日菜子様に続いて、私（わたくし）の意見も聞いてみたくなつたと

ここまで言い終えると、シーラが納得したようにうなづく。

実はシーラ自身には不明な点もあり、話を完全に把握しているわけではない。
だが、それでも真摯に話を聞いてくれる。

説明不足な主人公との付き合いが長いのだ。

△主人公△

「そうそうそうそう。

何て言つたらいいのかな……。

どういう聞き方をすればいいのかな……。

……そうだな。

あの作品つていうか『主人公』と『彼女』について、シーラの個人的な意見が聞きたいかな。

わたしと日菜子と同じく、主觀多めでよろしく

だから、このような少々唐突なお願いにも、すぐに対応してくれる。

シーラは一度考えこむように頭上に視線を巡らせたあと、ゆっくりと話し始めた。

●正面 15センチ

「『なるほど』という感じで。

相槌を打つて、自分の意見を述べていく。

シーラとしては件の小説について、主に『授業の題材』『主人公のお気に入りの作品』位の認識でいた。

だが、作品について『主観多めの解釈』がなかつたわけではない。

『もし主人公に感想を求められたら、こういった事を話そう』と考えていた事はあった。

なので、それを思い出しながら話していく
然様（さよう）でございましたか。

そうですね……。

私（わたくし）が、日菜子様が仰る所の『主観が多め』の解釈を述べるのであれば

（主人公）

「うん」

●正面 15センチ

「穏やかでありつつも、比較的さらつと。

主人公は『小説の主人公』に感情移入しているため、『小説の主人公は、なんとしてでもヒロインと対等になろうとしている。対等になる事こそが、二人にとつて最良の結末である』と解釈している。

だが、シーラは『ヒロイン（彼女）』の方に感情移入している。

そのため、主人公の解釈とシーラのそれは、実は大きく違う。

だから、己の『主観多め』の意見を伝えるのは少々申し訳なくもある。

だが、主人公は自分と意見が違った事で怒ったり、へそを曲げたりする人物ではない事も理解している。

なので、さらっと自分の意見を述べていく

実の所……。

【※】でくくった部分を※ 少し強調した感じで話す。

『彼女』と『主人公』の部分

『彼女』は、『主人公』が思う程、対等になる事にこだわってはいないのではないか」と思います

（主人公）

「え？」

主人公、シーラの言葉に、思わず声をあげる。

主人公は一秒前まで、聞き手に専念する決意をしていました。
具体的には、

『シーラが話し終えるまでは、絶対に相槌を打つ程度にとどめておく』

『それはとにかく話の邪魔をせず、シーラにのびのびと話してもらうためだと、考えていた。』

だが、その計画はもう失敗に終わった。

そのくらいシーラの意見は、主人公にとって『まさかの解釈』だつたのだ。

●正面 15センチ

「穏やかに優しく。

先ほどの自分の発言を補足していく。

『主觀が多め』でよいとの事なので、『小説の主人公＝主人公』『ヒロイン（彼女）＝シーラ』という事で話している。

こここの『彼女』と『主人公』は特に強調しない

彼女は、主人公の想いを嬉しく、ありがたく受け止め。

心から感謝しています。

ですからその気持ちに報いる為、最大限努力するでしょう。
それは彼女にとつて、当然の事です」

「主人公」

「ほおう……？」

しかも、シーラの言葉は、くつきりと断言系だ。

なので主人公は、

なんだなんだ。

シーラのやつ、わたしが自分の意見を熱く語った結果補習になつて。『なんでよ！』つて
むくれてた時には、まあまあ面白がつていたくせに。

実は自分も、なかなかの持論をお持ちではないの。

—— 実は結構、この作品の事気に入つてたとか？

と、思いつつ、続きを聞かせてもらう。

●正面 15センチ

「**穏やかに優しく。**

先ほどの自分の発言を補足していく。

『主觀が多め』でよいとの事なので、『小説の主人公』『ヒロイン（彼女）』『シーラ』という事で話している

……ですが。

それはあくまで、主人公の為。

【※】でくくった部分を※ 少し強調した感じで話す

『主人公』は、二人が『対等になる事』にこだわっておられます……。

『彼女』は、『対等になれても、なれなくても、自分の気持ちは変わらない』と思つてゐるのではないでしょうか。

【穏やかに優しく、自分の意見を述べる。

『小説の主人公』『主人公』『ヒロイン（彼女）』『シーラ』という事で話している
たとえば、主人公が最大限尽くして下さった結果、それが叶わずに終わつても。
彼女は主人公の心配はそれど『それで構わない』と受け入れる事でしょう。
私（わたくし）は、そう考えます』

〈主人公〉

「……それはまた、どうして？」

しかし主人公は、ここまで話してもらつてなお、シーラの意見を飲み込みきれない。もちろん、シーラの言つている事自体は理解できる。

だが主人公は、これまで散々主張してきた通り『恋人と対等な関係を築く事』を至高としている。

そのせいで『対等でなくともよい』とする意見自体、飲み込めずにいるのだ。なので主人公は、

——うう。

こんな感じだから、わたしは視野が狭いとか言われちゃうのかな。
大丈夫なんだろうか、こんな体たらくで。
わたしという経営者は……。

という気分になりつつも、シーラを見上げながらたずねた。

●正面 15センチ

「【穏やかでありつつも、比較的さらつっと。

あくまでオーダー通りの『シーラならではの意見』である事を強調する

それは、私（わたくし）であれば、そのように考えるからです』

〈主人公〉

「えーっ！ それ、主觀多めどころか、完全な主觀じやん！」

だが、そんな主人公に、シーラはなおもはつきりと主觀を述べてくれる。

シーラはいかにも主人を立ててくれそう、意見が対立しても譲ってくれそうなおしとやかなメイドに見え、それも正解である。

だが、実際は自分の意見がしつかりある方だ。

そして主人公は、シーラのそういったところを頼りにしている。

だから今も聞いてみたのだ。

シーラなら、主人公の意見とも、日菜子の意見とも違うものを与えてくれて。それが主人公の欠けたところを埋めてくれるのではないか。

と、主人公は期待していたのだ。

●正面 15センチ

「くすくすと笑いながら。

驚いている主人公が可愛らしいので。

また、この件について自分の意見を述べる事が出来、それを主人公が聞いてくれる事が、とても嬉しいので】

然様（さよう）でございます。

主觀です。

【穩やかに優しく。

すでに『主觀』を越えて『自分がもし『ヒロイン（彼女）』であれば、どのように考えるか』を、自分と主人公の関係を例に述べていく】

だつて……これから例えば、何（なに）かの間違이があつて。

お嬢様よりも、私（わたくし）の方が、立場が上になるような事があつたとしても。私（わたくし）がお嬢様を想い、焦がれて。

お側にいたいと願う事に変わりはない。

【一呼吸おいてから。

穩やかに優しく。

『だが、全く対等な関係に興味がないわけではない。対等を目指すべき部分と、そうでなくともよい部分がある』事を伝えていく】

それを踏まえると、確かに。

『ふさわしい女性になる』という意味では、将来的に『少しでも近づければ』『対等にな

れれば』と思いますが……。

『精神的な釣り合いが取れているか、取れていないか』『どちらの立場が上か、下か』と
いう意味での『対等さ』は、あまり重要でないようと思えるのです』

△主人公

「ふー…………？」

だが、主人公はなおもまだ噛み砕けていない。

シーラがここまで丁寧に解説してくれているのに、

……いや、やっぱ対等であるに越した事はないんじやないの？
そしたらさあ、シーラももつと自由に行動しやすくなるし……。

と、自分の意見に固執してしまっているのだ。

●正面 15センチ

「穏やかに優しく。

主人公を優しく見つめながら話しているイメージで。

自分の一番言いたかったところを話していく】

つまりは。

今後何がどうあろうと、私（わたくし）はお嬢様のお側にいる、という事です。

この先貴方が大きな成功を収められ、今以上の立場になられても。

逆に……思うようにならぬ事があって、少々苦難の多い道を歩む事になつたとしても。
私（わたくし）は必ず、貴方様の隣にいる。

それは私（わたくし）の中では、もう決まっている事ですから」

〈主人公〉

「……！」

だが、さすがの主人公も、ここでようやく理解に近づいてきた。

『小説の主人公』と主人公は、想い人とより良い関係になるために躍起になつてゐる。
だが、その想い人であるシーラとヒロインは、現時点の関係の事も、とても大切にして
くれているようだ。

それゆえに二人は、無理な変化を望んではいない。
たとえ、このまま関係に変化が訪れなくても。

あるいは、突然大きすぎる変化がやってきてしまつても……。

『変わらずに接する』と決めているようなのだ。

少なくとも、シーラはこの小説についてそう解釈している。
そしてシーラ自身もまた、主人公に対してそう考えていると、伝えてくれたからだ。

●正面 15センチ

「優しく微笑んで。

主人公がようやく要領を得たようなので】

ふふふ。

ある意味私（わたくし）は。

お嬢様の、永遠（えいえん）のしもべなのかもせんね】

（主人公）

「そつ、か……。そういう意味で、言つてくれてたんだ……。」

だから主人公は、何だか泣きそうになる。

シーラはずつと主人公を応援しながら、今の、この状態も愛してくれている。
それがわかつて、涙が出てきたのだ。

今後も、主人公が未来のために努力し続けるのは変わらない。

それでも、主人公にとつてはまったくままならない、改善の余地がありすぎる今すら。シーラは楽しんでくれている、愛してくれているという事実は、とても嬉しい事だったのである。

●正面 15センチ

「穏やかに優しく。

主人公を優しく見つめながら話しているイメージで】

そうです。

私は（わたくし）は、お嬢様が思っているよりもずっと。
お嬢様をお慕いして いて。

「ひときわ優しく。

『この関係』とは『主従関係でもあり、恋人関係でもある関係』の事。
シーラにとつて、主従関係とは全く悪いものではない。

主が主人公だつたおかげで、とても幸せでよいものだと認識しているので】
同時に……この関係を愛しておりますから】

さらにシーラは、主人公に繰り返す。

きつとこれから先も、何度もこう言つて。

主人公を安心させ、自信を与えてくれるのだろう。

そう思つたら、主人公は……真っ先に伝えねばならない事があると気づき、慌ててこう言つた。

〈主人公〉

「……わたしも。わたしも一緒！

今まで、何でももつとよりよくすることに命懸けになつてたけど……。
よく考えたら、わたしもシーラと一緒にだつた。

わたしもこれから何が起きてもさ。

シーラとは、絶対一緒に居るから。

それは覚えてて、ね！」

●正面 15センチ

「穩やかに、嬉しそうに。

主人公が必死に、真剣に思いを伝えてくれる様がとても可愛らしいので
あら。お嬢様も同じように思つて下さるのですか？」

〈主人公〉

「そうだよ！　ずーっと！　ずーっとそう！」

こくこくと何度も頷くと、シーラが微笑む。
それを見て、主人公は思う。

わたしたちつて、相変わらずほぼ同じ年には見えなくて、主従関係にしても、主の方が
ずいぶん頼りない感じの二人だけど……。

ずっと、今よりも良くする努力はしながら。
変わらずずっと一緒にいたいなあ。

……これからもそのために、わたしは生きていくんだろうなあ。

と。

●正面 15センチ

「少し泣きそうになりながらも、嬉しそうに。
主人公の言葉が、とても嬉しかったので」
……そのように仰って頂けるなんて。

私（わたくし）は、この世で一番の果報者ですね……♥」

そんな主人公に、シーラがささやく。

その声を聞きながら……主人公はまた嬉しくなつて、シーラにぎゅっと抱きついた。

シーラ、主人公の左耳にささやく。

★左　ささやき　0センチ　※マークのセリフまでささやく

「とても優しく、愛情をこめて。

主人公とお互いの気持ちを確かめ合つて、絆がさらに深まつた事が嬉しいので】
愛しておりますよ……お嬢様。

何があつても離れません。

これからもずっと。

永遠（えいえん）に、共にありましょうね……

♥

※

【※1回※　耳にキスする。

軽く、優しいキス】

ちゅ　♥』

ここでフェードアウトして終了。